

## CONTENTS

- |                                   |                               |
|-----------------------------------|-------------------------------|
| 1 ●令和5年度(2023年度)立正大学FD活動について      | 6 ●令和4年度(2022年度)授業改善アンケート実施概要 |
| 2~5 ●令和4年度(2022年度)ベスト・クラス賞 受賞科目紹介 | 7 ●FD研修会活動報告記録                |

## 令和5年度(2023年度)立正大学FD活動について

立正大学長 寺尾 英智

本年度の活動テーマは、「多様な教育手法を活用した授業の展開」です。大学における多様な教育手法については、アクティブラーニングや反転授業など、従来より様々な形で必要性が提起されてきました。特に新型コロナウイルス感染症の流行への対応により、急激に対応を迫られた問題もありました。その様なコロナ禍での経験をも踏まえつつ、改めて多様な教育方法の活用が求められています。昨年まで4年間にわたり「教育の質保証に向けた取り組みの実質化」をテーマとしてきましたが、本年度は改めて教育手法そのものへ立ち返り目を向けるものとなっています。

具体的な研修として前期においては、全学教育推進センター主催では、外部アセスメント(GPS-Academic 1・3年生)について、全学の集計データのみならず、学部ごとの集計データ等について報告し、今後更に有効に活用していくための機会を提供しました。また、データサイエンス学部における多様な授業の構築と実践について、具体例を掲げて報告をいただきました。授業の性格や受講生にあわせての方法やソフトの選択、準備と配慮すべき点、授業マネジメントに至るまで、まさに「手の内を明かす」機会となりました。学部が主催し全学に開放されたものでは、社会福祉学部により発達障害の学生が抱える困難と支援のあり方について行われました。ASD、LD、ADHDなど配慮が必要な学生の特徴と関わり方、支援のあり方、障害学生支援室との連携などについて情報を共有し、



一層の理解を深める取り組みとなりました。

後期においては、障害学生支援協議会の主催となる、合理的配慮の提供に関する研修が予定されています。前期における社会福祉学部主催の研修と関連したものになります。その他、各部局においても検討されています。この他、学外における研修についても、開催情報の提供と積極的な参加を促してきました。また、文部科学省「持続可能な産学共同人材育成システム構築授業事業」による「大学等における教育FD動画コンテンツ」について、大学としての利用ができるようになっていきます。

各学部・研究科内においても、それぞれに独自の研修や取り組みが日々進められていることはいうまでもありません。アフターコロナの中で、すべての教員と職員が、それぞれの立場で創意工夫していることに光をあて、その成果であるグッドプラクティスを積極的に共有していくことを一段と進めたいと考えています。

# 令和4年度(2022年度)ベスト・クラス賞 受賞科目紹介 教員インタビュー

## 〈概要〉

2022年度授業改善アンケート結果より、ベスト・クラス賞を受賞した4名の先生に、授業設計のポイントや工夫をお伺いしました。



## 加藤 紫識 先生

(和洋女子大学 全学教育センター 准教授／  
本学非常勤講師)

受賞科目名：「民俗学2」(対面)

### ——授業の目的や概要、授業の流れについてお聞かせください。

この「民俗学2」は、1期に開講する「民俗学1」で扱った民俗学の理論的な学修を踏まえたうえで、個別具体的な民俗事象と、その調査や研究方法を交えて解説するという授業です。この科目の到達目標としては、第一は身近な慣習や行為が民俗事象として研究対象になることに注目することができることです。第二は対象に応じた調査方法を理解して、調査内容をまとめることができることです。第三は日本の生活や社会において民俗のもつ文化的意味や社会的役割を個々の場面で説明できることと設定しました。

特に史学科の学生や、博物館学芸員資格を取得する学生も多いので、私自身の民俗調査の経験や事例と、博物館学芸員として勤務していた時の体験談などを交えて授業を進めています。どちらかという授業よ

りこうした経験談のほうが興味をもって聞いてくれるようですね。

### ——加藤先生が授業を行う上でポイントにしていただくとお聞かせください。

授業では、毎回資料を配布して、その資料に沿った内容のパワポデータをスクリーンで見せながら進めています。配布する資料はパワポより詳しく作ってありますので、学生は私の説明を集中して聞きながら資料を活用してくれるだろうと考えたからです。

### ——それなら板書を書き写すことも必要ありませんね。他に工夫なさっていることはありますか？

授業が終わって4日以内にwebclassからリアクションペーパーを提出してもらうようにしています。そこには授業の感想や疑問に思ったことのほか、授業の後に自分で調べたことなどを書き込んでもらっています。それによって、学生自身が授業で何を学んだのかを整理することになりますし、私も理解度を確認する機会にもなるんです。

そこで寄せられた意見や質問は、次週の教室内で共有しています。私の回答や、他の学生の意見を知ることによって新しい発見に繋がって欲しいですね。

### ——学生の学修意欲の向上への取り組みという部分ではいかがでしょうか。

民俗学が扱う事象というのは、「遠い昔の誰かの事例」ではなく、自分たちの現在の生活に繋がっていることです。授業ではそれがどのように変遷してきたのかを具体的に説明することで、「現在の自分たちの問題や課題」として受け止めてもらうように意識しています。学生自身が自分たちに関わる事例として実感し、考察できたことが授業の充実感や達成感に繋がっていると考えています。

### ——授業を実施する上での今後の課題や将来の展望についてお聞かせください。

最近、民俗学の基本的な理論である村落社会や、かつての生活様式を現代社会と対比させながら、日本の基層文化を捉えることがイメージしにくい時代になってきていることを痛感します。例えば、「かつては家の外にトイレがあって便所神が祀られていた」とか、「病気になるたら医薬品よりも願掛けやまじないを行う」や、「村落で死者が出たら、葬儀業者ではなくムラのみんなで葬式の準備をする」というように若い学生たちには想像しがたいことが多くて、実体験としての民俗

事象やそれを意識する機会が減っています。

なので、「多様性」や「個人の選択」ではかたづけられない日本文化としての民俗事象をどのように現代社会や生活に関連づけて、より具体的に説明していく方法を検討する必要があると考えています。

—ありがとうございました。



## 本間 俊文 先生 (仏教学部准教授)

受賞科目名：「日蓮聖人伝2」(対面)

—授業の目的や概要、授業の流れについてお聞かせください。

この授業は、法華経信仰によって世の人々を救う道を開いた鎌倉時代中期の僧侶である日蓮聖人の生涯(日

蓮聖人伝)について、思想と行動の両面から究明することを目的としています。日蓮聖人伝研究には実に多くの先行研究がありまして、これまで様々な事柄が明らかにされていますが、この授業では最新の研究成果を踏まえつつ時系列に沿ってその生涯を学んでいきます。特に日蓮聖人伝における「史実」と「伝承」の違いに関する理解を深めて、学術的視点から日蓮聖人の生涯を体系的に説明できるようになることを到達目標に設定しています。

—授業を行う上でポイントにしているところがありましたらお聞かせください。

日蓮聖人は今から約800年前の鎌倉時代を生きた人物ですので、現代を生きる私たちとはかなりの時代差があることは言うまでもありません。学びの中で受講生が漠然と感じる時代差をどのようにして埋めて、日蓮聖人の存在を受講生にどれだけ「実感」させるかということが、この授業を進める上での大きな課題です。

授業では遺文という日蓮聖人が書き遺した文献が主な史料となるのですが、あまり情報過多にならないようにできるだけ要点を絞って毎回A4両面1枚以内のレジュメとしています。その上でPowerPointで作成したスライドを毎回提示しながら授業を行っています。スライドには受講生の「実感」につながるようにできるだけ多くの遺文や寺院、霊跡などの図版を盛り込むよう意識しています。また、提示する遺文などの史料には現代語訳を併せて示して、鎌倉時代の文献でも受講生が理解しやすくなるよう努めています。

また、この授業ではTeamsを日常的に活用しています。資料配付や課題の提示や回収はもちろんですが、受講生からの質問対応の場としても大いに役立っています。

—授業を実施する上での今後の課題や将来の展望についてお聞かせください。

先ほどお話しした通り、鎌倉時代を生きた日蓮聖人の存在を現代の受講生にどれだけ「実感」させるかということが、この授業における最大の課題だと感じています。日蓮聖人直筆の遺文を直接拝見したり、実際の布教地に赴いたりできれば最も効果的なのですが、大学の授業の中でこれら全てを実現することは困難です。そのため、せめてできるだけ多くの図版を用意してスライドの充実努めることと、受講生の身近にあるものに例えながら難解な内容を端的に伝えられるよう一層努めることが今後の課題と感じています。

—ありがとうございました。

「日蓮聖人伝2」 14/15資料

身延下山と入滅



日蓮聖人の入滅を悲しむ弟子権経達 (鎌忍寺本『日蓮聖人註面鏡』)

### ●日蓮聖人の権病

建治3年(1277)	12月30日	発病、下痢(『昭和定本』1524頁)
建治4年(1278)	2月28日	病気のため手紙も書けない(『昭和定本』1454頁)
弘安元年(1278)	5月頃	痩せ病で苦しく、手紙も書けない(『昭和定本』1507頁)
	6月初旬	重態となったが、四条金吾の投薬を受ける(『昭和定本』1524頁)
	6月26日	快方に向かう(『昭和定本』1524頁)
	10月頃	再発して重態となったが、快方に向かう(『昭和定本』1606頁)
	11月頃	時々具合が悪くなる(『昭和定本』1606頁)
弘安4年(1281)	2月頃	病のため手紙も書けない(『昭和定本』1860頁)
	3月	小康を得る(『昭和定本』1913頁) ※『昭和定本』では弘安5年
	7月~12月	食欲なく不快(『昭和定本』1886頁)

### ●身延出山→「ひたちのゆ」を目指す

- 日蓮遺文『波木井殿御報』(弘安5年(1282)9月19日、『昭和定本』1924頁)  
「いけがみまでつきて候。みちの間、山と申し、かわと申し、そこばく大事にて候けるを、きうだち  
にす護せられまいらせ候て、難もなくこれまでつきて候事(中略)いづくにて死に候とも、はか  
をばみのぶさむにせさせ候べく候。又くりかげの御馬はあまりをもしろくをばへ候程に、いつ  
までもうしなふまじく候。ひたちのゆへひかせ候はんと思ひ候が、もし人にもぞとられ候はん。」
- 行学院日朝『元祖化導記』(『日蓮上人伝記集』56頁)  
「或記云、弘安五年壬午九月八日午刻身延沢を出御有て、其日は下山兵衛四郎の所に一宿、九  
日大井庄司入道、十日曾祿の次郎、十一日黒駒、十二日河口、十三日クレス、十四日竹下、十  
五日関下、十六日平塚、十七日瀬野、十八日の午魁に武蔵国窪原郡千束郷池上村に着玉ひ了ぬ」



## 小玉 容子 先生 (本学非常勤講師)

受賞科目名：「教育方法論Ⅰ（総合的な学習の時間の指導法を含む）B」

「教育方法論Ⅰ B」（対面）

### —授業の目的や概要、授業の流れについてお聞かせください。

この授業の目的は、教育方法の種類と特質を教師の実践から探ることと、総合的な学習の時間とアクティブラーニングの具体を探ることです。中学校・高等学校の教科や領域の実践事例を取り上げながら、模擬授業の体験を通してさまざまな技法を身に付けていくことを目指しました。

また、各教科と一体となって子どもたちの力を伸長する指導方法を学ぶために、「何を理解しているか、何ができるか」だけでなく、「理解していること、できることをどう使うか」をじっくりと考えさせる場を意図的に準備して、学生に取り組ませるようにしました。

### —授業を行う上でポイントにしているところがありましたらお聞かせください。

本来は、学生全員が模擬授業、つまりアクティブラーニングに取り組むことを履修の条件にしたかったので

すが、必修科目のため履修人数が多くなるだろうとの予測もあり、それをシラバスには載せられませんでした。ただ講義が始まると、よく話を聴く意欲的な学生がたくさんいることがわかったので、自由参加での模擬授業を呼びかけたところ、8割の学生が教師役として自分たちで考えた模擬授業を実践することができました。

### —授業アンケートでは学生からはどのようなコメントがありましたか？

「アクティブラーニングがとても楽しかった。最初はとても面倒だったが、模擬授業を行えて自信がついた。」「生徒として模擬授業に参加することで、授業の工夫や避けた方が良い指導を体験的に知ることができた。」「模擬授業はすごくいい経験。自分が教師だったらという想像がしやすくなった。」「アクティブラーニングを先生が実際にやって見せてくれたので、具体的なイメージがつきやすかった。」「先生の実体験や実績をもとに講義が進むので、主体的な授業の進め方や注意点が非常にわかりやすく楽しく教わることができた。」「というようにアクティブラーニングに関するコメントが多かったですね。

教育方法論の授業では、「授業のハウツーを学べばいいのではないか」という意見もありますが、授業というのは、型にはまったシステムティックな学習だけではないんですね。これからの教育に求められることは何なのかを、講義で話したことを思い出してほしいと思います。大学生になって初めての模擬授業は決して容易ではなかったと思いますが、試行錯誤しながらもやり切った経験は自分の強みとして大切にして、さらに新しいことに挑戦する力に変えて欲しいと思っています。



ます。

### ——授業を実施する上での今後の課題や将来の展望についてお聞かせください。

私はこれまで小・中・高さまざまな校種で児童・生徒と触れ合い、学ぶ者の目線で授業を創る楽しさを味わってきました。そのたびに感動し、共に学び合い、たくさんの涙を流してきました。これらの経験を、「いつかは自分も……」と思う学生たちに還元したいと思い、この授業で初めて大学の教壇に立ちました。

教職は、児童・生徒の可能性を開く創造的な職業である一方で、教員を取り巻く社会状況は変化し、学校教育が抱える課題も多様化してきています。多忙感と共に教職に対するネガティブなイメージをもつ学生も少なくありません。そのような中でも、教職に就こうと一歩踏み出そうとしている学生を応援する授業をこれからも展開したいと思います。

### ——ありがとうございました。



## 八木 善彦 先生 (心理学部教授)

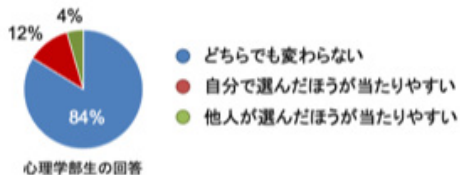
受賞科目名：「消費者心理学」(対面)

### ——授業の目的や概要、授業の流れについてお聞かせください。

この授業では、消費者のこころの法則に関する実証的知見や理論について解説しています。授業はスライドを用いた講義形式ですが、デモンストレーションや模擬実験をできるだけ多く取り入れるように心がけています。進行方法としては、はじめに教員がスライドについて説明を加えた後に穴埋め式の配布資料に受講生が書き込みを行う時間を設ける様式にしています。

#### 質問：どちらが当たりやすいと思いますか？

- Q: 宝くじを1枚買う時「自分で選ぶ」と「他人が選ぶ」のでは当選する確率はどう変わりますか



心理学部生の回答

損得に関わらない状況では客観的に正しい回答を選択

これにより受講生が教員の説明を聞く時間とメモやノートを取る時間を明確に区別できるようにしています。また、受講生のノートを取る時間中は教員が受講生の周りを移動することで、個別の質問を受け付けやすくしています。

### ——授業構成のポイントや工夫していることなどをお聞かせください。

授業にデモンストレーションを導入したり、実験環境を模擬的に再現したりすることによって先行研究における実証的知見を体験的に理解できるように努めています。さらに模擬実験においてはC-LearningやMicrosoft Formsを用いて実際に受講生本人からデータを取得し即時にフィードバックしています。これにより受講生は先行研究の知見を単なる教科書上の知識としてではなく、自分たちにも同様に生じうる現象として捉えられるようになってきていると考えています。また抽象的な理論については学術的な観点からの解説とは別に、学生にとって身近に感じられるような事例に置き換えた上でもう一度解説するようにしています。

### ——授業を実施する上での今後の課題や将来の展望についてお聞かせください。

この科目では2021年度まで授業資料を紙に印刷して配布していました。これに対し今回の賞をいただいた2022年度の授業では授業資料をすべてオンラインでの配信としています。オンライン配信により受講生は自由な様式で鮮明な資料を利用できる一方で、印刷やタブレット端末へのダウンロードといった手間を負うこととなります。正直に言えば学生が資料のオンライン化に対して不適応を生じさせたり、授業に対する満足度を低下させるのではないかという不安もありました。しかし実際のところそうした懸念は杞憂であり、受講生はむしろ思い思いの様式で資料を用意することで授業の効率を高めているようにさえ感じられました。今後も受講生の適応能力を過小評価せず、様々な方策を導入して授業の効率や利便性を追求していきたいと考えています。

### ——ありがとうございました。

#### 消費者心理学のここが面白い

- 自分で選ぶことの効果の実験(Langer, 1975)

① 2つのグループに\$1ドルの宝くじを販売  
自分で選択グループ: 自分で買うくじを選ぶ  
他人が選択グループ: 販売員がくじを手渡す



② 翌日、他所で足りなくなったのでくじを買い戻したいと依頼

	断った人	平均売却額
自分で選択	41%	\$ 8.67
他人が選択	21%	\$ 1.96

くじの価値を高く評価

損得に関わる状況では、人の本心を測定しやすくなる

# 令和4年度(2022年度)授業改善アンケート実施概要

立正大学では自己点検・評価の一環として、大学では2000年度から「授業改善アンケート」を、大学院では2009年度から「大学院生の教育・研究環境に関するアンケート」を実施し、学生からの要望・意見等を教育・研究環境の改善に活用しています。

## 《実施期間》

- 第1期 2022年7月4日～7月16日
- 第2期 2022年12月5日～12月17日

## 《対象科目》

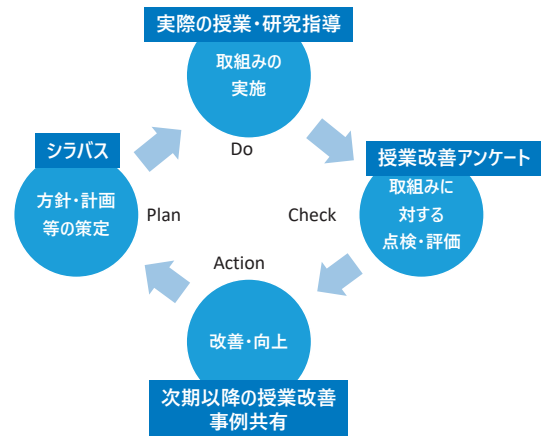
1期は1期科目、2期は2期科目および通年科目の全科目。ただし、受講者数5人未満、ゼミ、卒論、学修の基礎、オムニバス科目、集中科目については、学部ごとにアンケート実施の可否を決定。

## 《実施方法》

実施期間の該当科目授業時間中に原則的に実施。スマートフォン等からWebシステム「C-Learning」(以下、「Webシステム」)より回答。アンケートの集計結果は「授業アンケート」の報告書に、大学については学部編として、大学院については大学院編として掲載しています。

的に、実施・活用していくためのきっかけづくりとして、今回は『「教員コメント」を入力している科目は入力していない科目と比べて満足度が高い傾向にあるのではないか』という仮説について分析を行いました。

単に授業改善アンケートの実施に留まらず、その結果を組織的に活用することや、学生を単なる回答者として以上に参画させることを目指して、今後も授業改善に寄与する取り組みについてさらなる検討を継続していきます。



## 最新の「授業アンケート(学部編、大学院編)」(デジタルブック)

2022(令和4)年度版(令和5年4月発行)(デジタルブック)  
※デジタルブック画面よりPDFデータ出力が可能

## Summary

前向きな授業改善アンケートの実施・活用をめざして教員が授業改善アンケートを、前向き、かつ、積極

## 授業改善アンケートと内部質保証

近年、高等教育において特に重視されている内部質保証は大学自らが、自主的・自律的に教育・研究の質を向上させることが求められ、大学レベル、学部レベルなど様々な階層・側面での取り組みがあります。このうち、個々の授業科目レベルにおいては、この授業改善アンケートを積極的に活用し、上図のような質保証のPDCAサイクルを有効に機能させていくことが重要となってきます。



◀デジタルブック化された「授業アンケート」

「DS 学部における多様な授業の構築と実践～座学からプログラミングまで～」

本研修会は、全学教育推進センターが令和5年度のFD研修テーマとしている『多様な教育手法を活用した授業の展開』についての実践報告であり、本学熊谷キャンパスに2021（令和3）年度に開設したデータサイエンス学部から成塚先生にご報告いただきました。

まず、成塚先生が授業準備で直面した課題についての説明があり、新学部という前例やセオリーのない状況での準備の難しさがあったとのことでした。具体例としては、受講生の興味を引く工夫として、取り扱う内容の取捨選択、アクティブラーニング（問題演習、コーディング演習、グループワーク、発表会）を活用した授業構築、多様な学力の学生への対応等について実践経緯が報告されました。

授業の際に、受講生の興味を引く工夫の一例として、身近で簡単な例題を示すことや理論は実際の応用先とセットで説明すること、授業内で使用する各種データは、実測データやオープンデータ（例：サッカーヨーロッパリーグが公開しているイベントデータ）を使用するなどが挙げられました。

また、授業で使用する教材は、受講生のレベルに合わせたオリジナルテキストを作成し、成塚先生の個人HP（<https://sites.google.com/site/takumanarizuka/japanese/class>）にて、授業資料を公開されています。授業資料を公開する意図として

は、受講生のアクセシビリティの向上のためだけではなく、DS学部を含めた大学の広報・宣伝、コミュニティの活性化、社会への還元を目的としているとのことでした。

具体例な授業資料としては、担当する全ての科目で準備する授業テキスト、プログラミングコードとその解説をまとめたノート（Jupyter Notebook を活用）に加えて、板書ノート／スライドの3点であり、受講生の理解度を見極めながら授業を進められているとのこと、多様な教育手法を展開するための工夫が見受けられました。

受講生との情報共有については、現在は Teams を中心に活用されており、授業ごとにチームを作成し、授業テキストへのリンクの投稿やチャンネルに連絡事項を随時投稿することで、きめ細かい情報共有がなされていました。なお、学生が取り組む課題の出題・提出、成績処理についても Teams の課題機能・成績機能を活用しているとのことでした。

Teams を活用するメリットとしては、学生への情報共有を円滑に遂行できることや複数教員での授業管理が容易であることが挙げられました。

以上のように、DS 学部新設から3年を経過した中で、試行錯誤されながら多様な授業の構築と実践をなされている一旦をお伺いすることができました。

## 編集後記

Vol.29は、令和4年（2022年）度ベスト・クラス賞受賞科目の紹介を中心に編集を行いました。それぞれの記事では、学生の理解を深めるため、LMS 活用や Microsoft Forms を用いた様々な取り組みが紹介されています。今後 LMS のリニューアルが行われます

が、その利活用の際の参考としていただければ幸いです。最後に、ご執筆いただきました先生方、編集に携わっていただいた FD News Letter 部会の皆様へ厚くお礼申し上げます。

（地球環境科学部 川野 良信）

立正大学 FD 活動の詳細は、大学公式サイトより閲覧できます



RISSHO UNIVERSITY FD News Letter Vol.29

令和5年9月30日発行

編集発行：立正大学 全学教育推進センター

〒141-8602 東京都品川区大崎4-2-16

TEL：03-3492-6613 FAX：03-5487-3345 URL：https://www.ris.ac.jp